蕉翁句解抄

へ 5
784

利門
784
巻

○馬琴うしは
おきてそもそも
ぶんしやうをもとゝ
するなり

たゞかみ
言葉うしは
ちからとなりて「かゝ上」
の言葉なり

武山れ高氣は河内国殺城之住人の源生流なり
おもてをたゞぐ其義のまがごりを信へ惑して源の二生
寛之助是る生西れおもしがたりを信ずばかならずや
扱も風しそて生なる殺の加国坊のりて加賀の生博よ迷
れる事も伊勢を松浦まを源の物がこりをかつて
西南北殺の新語を補ふ潜殺の世流も消むそま
ぞは今こそ知ることへそも武は源川のわこうも殺の
しきうや事が言語の反古を見なれば言る
かいつめ殺る殺揺り出そ前伝る二の所なる殺
事殺のそもしそちかふ加国を机のう（3一巻言知ぬ

かゝて其口部に物語る歌のこゝ葛がある

かしあらふるゝ

寛政三辛未九月

武陵 及川藤次

朱唐

建氏又は渡辺宮内亮唐寛

葉井と御代蘭

江戸と住む画名高き人和泉伸

書て仙台に移り歌を学び安世君

理と渡辺と称して国学者家

集の高雅深奥御坊

芭蕉翁附随物から見録

● 芭蕉翁小枝かもとゝ小やゝる 并 稚蘭の句法 一

○ 翁の御物語り 并 小郎の句 一

○ 物さびた 其の句体 并 いのつまの句 二

○ 翁名東か文通の答 二

○ 翁近江の御 并 改題 不 三

○ 物さびな小所の俳句 五

○ 宝角建枝の句を興す 五

○ 鶴仲の法莚 并 其角侠客の威を張る 五

○ 宝角三井家を終る二百十六

○文台梅まつの花を紙に七
○まつ蟬遺 七
○まつ能宣一文通并乙比の句淀七
●文台夕ゝの雅事を探ぶ并四三の句案八
○文台重要をさし先人を芳野山に登る八
○まつ乙四が猶まつ奪ふ九
○牡丹坊紙狂并許六を狗集を影七十
○牡丹坊をめゝ過ぶ并ゝれの句十
○春しの梅月ゝもを忘十一
○丈ゝまつ来まつ理水城(仙)を会七十二
●杉風の愛を侍ゝ并まつを紙七十二
○嵐雪以下四帯を深七十三
○理波原ゝ十三
○理波遊人まふ并線句十三
○理波まつを〜る十四
○春四ゝ塚をまつ十四
○許六新を訪并乃ゝまゝ山田十四
○乃ゝ義ゝまゝ山貸牡丹を通ぶ十五
○泄雲物の陸の集をあつる十五
○思世ゝ登ゝまる并詩題の事十五

○源兎紀物語　十七

○宗兎酔客　十八

○青丹坪の子紀の郎　房紀の娘姫を恋る　十九

○青丹文方さとのふ

舊門頭陀物語

宗貞述　馬琴編

○おきなぶ花の色ふ色香　桜風の為

本国城の蒼海を陸て鮫の姿こそ様子　少丈のもとみ

旅路て役をぐらの物語りふあるう　嵯峨

あらく　と日を経たるも秋の山

小枝　能しるあるう　戸こそふ　山の高八丈　二里大道を

うえ秋の地色を　却　むへ　と日を文　星　この　海　人　を

ふ　家　結たる　油　ふ　り　は　日　土　山　れ　も　れ　な　ま　は

まる　申　文　家　の　ち　日　そ　い　は　も　ち　れ　で　山　そ　い　ま　た　八　ま　色

て　家　家　の　蒲　こ　の　ら　れ　ふ　そ　あ　ま　雑　ま　り　な　ま　ぬ　て　ま　れ

ばこそ生涯ふ枝ありとなるべき世界情の風
を毎年ごとにうりわたしの情の風をもむ多の情を
あらしあらくなるは津きたるも果て風なくて肌を
あつう爽き秋の海なるべくはやをしはで沈を紫風
そなほ少なるべくんばとあばくんと山を踏しは荘
るを考ふるの深地を神ゆるしおはしまをまを
所業の文あるべし

小倉の御物ごろう 光孝の句

あるべきものがたりなるは実物は宮殿があるを迎ひ屯
るあれば水屋ひつぎなるをきだんね花の御ごつもの見の

却りし蒔物ものとねて松を思ひ御は去
年を望見ふは時て生物をふはしくれて沙をき
四季の根看之の花いきかうつり中も見てそ
物ものを花四の沙を時つまて沙をえりつく枝を力を剛
良は一のれて物をれ物ぶ物を生し国を入をふはも
又紅のつき事のり沈ん頃摂津をおはれあるは鼎
を事ならして沙きけなきもあるそよ松はやをひ物
のを卯月なのバこそ中きこて物四一をを大如路を人
て頁つるあを道を沙をれ水き口物を事ぶり者しなる
ぶの沙を事ん之沙をるむがら花森まいそぎ野山けいたら

あらたる趣まことに世たるぶとゆえあひまで隆の花たの位よ
春雨の切れつかなく咲のうたを見て
くたびれて宿のころやう藤の花
かくこふ匂のうつうたるあなたを二なくおもえこれらのかしき
旅の宿花もいまむ
○ 箱根の匂 元いなづまの位
秋のもとあるいやまきりて降のうあるの屋をおらづり
相ほくそうてあそうしけなるよ柿実のうだけたるうたをの
たる酒みしてゆのたなぶる柏うちしゃ楊の枝もを往うて
むつまじきもおきを語へいなづまやくらはもの人所よ

人のありたれはをこうの衣句ものいんうをを腐のかしも
おうに法師 まいりあなたの先にのうて
いなづまや関のうこの山住の新
○ 箱根東うの文四の会
又ある物語を考てもまたるうものかを師走の一のはた
ばしをふ雨をを水はをを指ものの形をうをぐまをのおもし
つを山里もあを又四会をの一ををのをりこをは翻
きう(ぶきいをまなをを水のをををりまを(四つ帯をを
をあをををを法ををををををを
山里はあの山をおをを柿の花

去年、高とおくられし直事の高さ二尺ゑ解ほどを
きふらふ山さを屏風きも梅の実ゑ手毎のきたんをう
らもおそしるうを屏風ほうんみ山さを梅き（さ）ゑ手毎
歳ゑ、こゆ事ゑと京なつ、き、潮はうん筋この五ゑ
ゑこゆ事ゑ京なつて去今年の梅月ゑ事ゑのたりを国てまふ
らふる梅の新ゑ花梅をこの年をもくらんの如雪ゑのを去
ゑ律ふぐらおのーのりてくらんの糸たゑ〳〵とあざ笑
あのまく菓子ふる八九くらんやうが買ゑ事んとやーき
梅の実
まあり

○筆江戸柳 弁改国 入小

おきた一ゑ二ゑ事ゑ国ゑを過て拾ゑ事ゑりやきらふ、うた〳〵を見
ゑバうしわさ、と屋ゑ、ゑ流行源ぶ恭ゑ花やゑるゑりて
ゑ鶴の家根のゑを右ひたゑ瓦の屋敷ゑ入れし扇ゑ
鶴をひなぐ一初ゑなーゑ、ゑうあしゑて立ゑ屏り
さゑ、ゑあ〳〵は目をひらき又ふぐ新ゑ不ゑるのゑしゑゑ
たゑるものゑ、ゑこのれゑ学ゑるおゑて右ゑ学ゑ事ゑ見ゑ
ゑ近腰ゑ、ゑん

屋見ゑ屋屋せゑ学ゑ、ゑり、

おゑうのゑも、ゑ屏ゑり所ゑ雑屋のゑあゑゑ時ゑ行ゑうて
ゑ学ゑれゑたゑ来ゑの右ゑ来ゑこゑれゑのゑうて時ゑのゑあゑう

ときしば涙しをゝるほどなくけたりものこゝもとなきはづ
いうあやみいぶん膳をおつて出るゝ思しおたる紅葉の
風ゆゑうりて女臘梅ゝはさゝけるゝ人のゆきゝびなるを
女ゆゑ人をみるゝとをこゝろをきゝられちのくるものをあかく
のあらまをとふとのこゝとなのーごりて男の宮を書ても
のは紙の下は眼をあきぎ紙のたからを書たものは紅葉よ
神ととして女ゆゑ神をとゝふものゝ山は梅をくゞ
りて袴を脱りてさめたる雪は梅の蕾をありしものをむ
のーをを抜ゝたのしもは八幡の石清水の仏のほの燈
をたゝら(て)彩ゆゑ無ほの浮るかこる歩行もおぐざる所)と

白き歯をあらはして笑ふ(る)昼寝をひらけてこの
めのいとをかしくまことるまぐれたるも人の侍をも(歌八月下
旬)
雨も雨と侍りたゝ(ゆゆはかなる)をねる夏のこまか
なるまゆる羽をはらもむもをもをもをもり糸もゆゆにと知ら
ばこれ伝ゞ手を梅ゆゆとこの(ゆることも)ゆゆしかん(只元
を知ると知らざると定まる)ゆゆを見ると思ひを出ると思ひの
二義をいふ歌こもし和ゆゆをこゝゝ家服を旅服
の(ゆゆ)をこゝ(うもをうぎのゆゆ)か(廊の)夏を(ゆ)ゆ(ゆ)この(て
元の様をあたんばや思ふこと年ゆゆんゆのこゝゝ
して筆をむゝ生昼寝をねゝんと侍ゆゆして只

をくらの首まで田沼の坂のほとりのぎ木の間より見
を通せどめし　家の内雪のうえ人こそとおまるほまも
きまきまりたるかりはこそ　ものきもの
昔腰物をこれとうえ　もじの数まもるの物見ひ
ゆふなそて大きをもあて　庵よりたるたまつたなるらば
見えを
家見るうきをを　故のまたなばいづこも立の枕なるまし
後しして曰系伊城ろう　しは海の雪降るうこ枕をひら
き羽命れをこいぶたハ　ちを後のみ　つきまを
んで生渡の討とた泄　泄系所跪を

こく見申なるはも　るまれをそ水ろ沼の
あハれと深く思ハらく　其山の人なりしが　沼跪をの
○谷山の明月
尚日ふるがとりのりしはうき世のまて片時ハ所なるるは
尚日ふるがとりのりしはうき世のまて片時ハ所なるるは
白久しきを　伊部の　庵をして　人前もなるし
いろはや五月雨の　帰るて　坂ハ　忍上て　枝と　押もひるる
あ白ハ　見ることそ　神も　ばは海ハ　小所の　姿ありぞ
白年の　家をのらはを　帰ることし　世取　なのを　拝年の　山
立ふへ　さまくを　ふるるた　恋をして　寄えたれハ　うれし
ばるる　氏白を　入る　こ　ぞ　うき　年の　のぐ　なるる　百と

書院（ゆか）を焼き捨てたる事家人ともいひ北中の老人ども
ひそかに二三人あるく事ども顔らふしうしろ姿を
○其角野坡句を問ふ
岸侵拍子の時其角野
秋の空尾上の松ばかりかな
野坡曰く
葉ごとに星の光りの山かな
句いうんうんとやがて野坡曰く
もふべきなれば只今のもの
なれたるものなり
座の中も
座しと其角云へり
○義仲寺の法莚
其角侠客の風を振ふ
其角俳諧の法を乱さき訪ものの法莚義仲寺

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 真角三井寺にて二首

去年の事なりしかば酒屋にあるかたびらの人々なれてこそ井寺の水の月をもながめ給ふらんなどいふ歌たゞ湖水の月をのみ詠じたるこそ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はこ春さうひの長芭蕉中之き者きゝゆきぶの（る俗る日正
秀ぶ一面ゑ今日人々ゆつきてきのふの一年越ゑたばて春
の春既ゆれと雪ゆ角見を中て春ゆるを一ぶ
上一春風の作者は角も再び自ゆひらき春ゆ
○文芳選法
文芳人ゆ句ゆ氣ゆ毎日刻めゆく工夫を
一歌の中ゆ行ゆ才は俳ゆ技ゆありてゆゆは者ゆの
るの形ゆ人ゆ其ゆの句（俳）ゆ（ゆ）ゆ詩ゆ（ゆ）ゆ
く（ゆ）ゆ俳ゆ者根の一者根ゆ者ゆ一ゆ
（俳）ゆ一ゆ句ゆ文面ゆ者ゆ才ゆ閑

て俳ゆ者ゆ俳ゆ師ゆ者ゆ句ゆ（し）ゆ系ゆ俳ゆ
ゆ

蓮の葉ゆ蓮ゆ於ゆれば如金ゆ知ゆれ　芳
閑里書ゆ者ゆ俳ゆ

○文芳句ゆ者ゆ俳ゆ
あゆゆの者ゆ句ゆ者ゆ（ゆ）ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ
ゆ者ゆ俳ゆ一句ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ
次ゆ者ゆ者ゆ（ゆ）ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ
ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ
者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ者ゆ

[illegible]

○文政紀年文題 并 乙巳の部

文政年間の北亮文題きほへ[illegible]はみの山茅[illegible]かられ

[illegible]

[illegible]の月

この事[illegible]

やゞてあらる山を西[illegible]の月

[illegible]

風雅の中[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅いまはあらぬ世も月の光よ清て
たゞらく雪よ匂ひ袖ぬれて玉を拾ひるものゝ
めよ入らんとせし枝もあらぬ
あき一梅深くを探すやや
凡句を集ぬるとゝふは深く入て嵐きを求むとは是
用の句集よ入てまゝ拾ひ集ぬるし句作は拾て
る無ものもなく取捨の用をたゝんとはこゝ
○支考童子をきゝはゝて先達山をたゝる
まち美濃のゝ国に俳諧のもり雪を成り梅をなぶめて初
雪の句を集ぬつゝけ出の一句をゐたり

雪ふるもの冬ゝ
まち美濃のゝ国に俳諧のもり雪山
の一生の句を集ぬ日を以て句を見ゝて下ゝ
きぬ平病ゝ行ぬれば人の住をおこす事かたしと童子
中をしるはこゝのの雪のおもしろきゝ
山を拾ひ出ぬ来ゝは大如路より御光ゝ
うゝやゝとゝふゝ音ゝ見る間ゝ来もきさらぎの末
つゝこゝのの梅ゝきさらぎを待えて杖をひゝてちこゝ
[illegible]ゝ杖は雪間のゝ一月の末の中旬を尽て去来徳
こゝゝ見ゝ来ゝ音ゝ更ゝて古歌のゝ流を

そぐ日もこゝろ細く木の下ゝのれ谷の水音もふるめ
まなき童子立ちぐんで石上る風くぐせばれば日有の舞こ
人家を求めこゝのゝごこるみきんみ面まなはは新を問ひて
家天下と源男を始り寄つ一わくと鶯をうらかなる
此童子眉をたつて曰ゝみしきぬ人のれとくもく並ぶ
らすして家を行脚の奴とはなり蕗を取りまく知
らぬ来らしまの奴者文　打ゝ為こて童子が背中をたゝき
あれすとうとうぶかゝるゝ日を撞こて山をくぐる

○まなたしゆが俳句を奉ふ

素友を詩ゝうして曰ゝ、嘉祥、句を俳諧に作れ

と申ゝ

芭蕉の新を訪ふ見せ初く
ゝ句問ひ者ゝ句ゝ石ゝ名ゝ句ゝ
新数の中あひありと雅俗を句を取たれば一住
よつこびてきゝい出ぬ者ゝ一初もて己ゝ句ほぐる
ぬゝふてゝ句ゝたゝ板はうこみ
ゝふゝ句ゝいでぬ文芭蕉を問ひて
芭蕉の新を問ひて
ゝはゝうまゝ句ゝ句ゝ
句なり芭蕉ゝ句ゝ句ゝは見花日ゝ蛙ゝ句名
ゝ句ゝ芭蕉ゝ句ゝ句なれば蛙ゝ句ゝ二たび
ゝ句ゝ芭蕉ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ
ゝ句ゝ

○ 蛇足坊 [illegible] 天狗集を [illegible]
蛇足坊 [illegible] 白雪の [illegible] 白雪の [illegible] 芭蕉の
句を [illegible] 鉢とき [illegible] 雪の [illegible] 雪の [illegible] 芭蕉の
門 [illegible] 蛇足坊 [illegible] 蛇足の
西風を [illegible] 蛇足の
[illegible] 蛇足の
[illegible] 蛇足の
[

くる夜ごとに入て牛町を通るに袖ばかりしみもるを見おりてを
なぐこの梅のおもかげをゆびおもひつゝ
ぐく妨そのこゝろをつらくまもり見ねこせとゝひて
女神よたゞなるとなくちるとてれのれ

○たゝ良の梅月おもてのあ

奈良の京なる住める元梅うるおきおきはおもてゆび
てあてやのようにらうそくはなきけ四りふ人もものは
るとはり年のそはるうしゝうなゝびを元梅る風
牡をゝびの月梅とも見遠りがおもしかる
梅をなゝて梅月をゝる男とも元梅ゝのつまてゝ
まだ若くふきくるゝもこゝ世のの花紅きうら
ゝをゝのひとのくゝを見なくわ年あるゝまの花を傷て

梅のとりをゝしの心うゝわかれぐくもあるの色ゝだも
世をうちくゝとゝ色ゝ和ぞよ社なるうゝり女
おもふ四月ゝは梅の文
ゝ月句して垣ゝゝあきやりてきゝのうゝてのゝ梅ゝ
たりおゝうゝ行ゝくおもひなぐゝそらよおうゝて女の
ゝをゝ梅色ゝ女

たゝ妨やこの梅の葉のうらゝゝむ
世をゝうらみたるを風もあがるのつゝこゝるをひき
ゝり短毎ゝを（ゝゝ歌

きるゝのゝゝゝゝのゝゝゝをゝ指ゝも
おゝこゝなゝきのひゝゝなゝこゝ和ふのゝりゝもゝくゝり
風ゝくなゝゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝのいゝきゝたゝびゝゝの

なくなりしもいとしこの

○丈さきちまき丈たち理水城人石山寺に

山巻うちつれて石山まのぼるやよひのつもごりなれば雪の花

ぎりれみれる山の梅ほころびそめのうしろ雪のたいそ

まひもさかあなと雪もんしてもこるるかぜを

む去年白洲清きよしなきものうの風白雪の如きなる

て人上のかだ一止時なしれば石社もしらだ雪もし

らだまを拾て一本花をうつ花をうつ四つきわざ

ならん丈上の白洗ちら拾ぶ小洗ちを生

到酒よ流れうれて拾ふそ森社重家こなる角ば

わし実ちもて何まか拾ん丈ちをうの又一物ちて人ちを

一物なし蕉たるは生到の陣ちの家は拾ちるうきを

なきはず合ふ一洗時ぶ洗時ぶ一清ぶうかも観合なるば

このさいなみのまのかきはぶ一ぶ一ぶ一ぶ一ぶ一ぶ一ぶ一ぶ一ぶ

家は山石を堂のしもものなり理水城いのんの丈一るあ

人只うなづく丈たの白風風雅ぶ石寺のうはこ家はう

き世をあまりして洗時の春狂人

○杉風の雲を一つ文たち鏡

杉風は雅門の子育こ丈一つ丈ちて山の訪音を尋ひ

そしく飛鳥の白雲をうち拾門をうぶ庭をあ中

流おごそかなつとめ長廊ちる家白傷をいそなこちの

丈たち文と復一の紅ハ甚甚の石を信て風雅を鎖

ちあきまりの付やもち一与武る脚を丈は丈脚をきう

わらんと歯を噛で白りしそ

○ 嵐雪は芭蕉門の四哲を評して

嵐雪は芭蕉門の人の格をもて文章風もうしなはれぬべく人之[illegible]等主翁正秀よくゆるめたり　孤屋[illegible]沖の行[illegible]

○ 野坡流行

理坡と号せしは浪花の理坡なりこれたしかに西国の俳風なるべし志ばらくは浪花にあるを野坡

○ 野坡俳人なれども

あら夜雪ふる炉ぬりておもての人音ふけゆくまゝ辰巳うつきて叩たりあのつきたのくなつて陸奥ひとかあけ盗人の入まゝ姫はどつてくもまくらの人ゝとゝあなく理坡

おきはのりて炉ぬり人まのひ音理は主鍵だもなれ

どめ一斧よき家一斤を得たり坐うちゝ（あくこまり

て人のたゝずゝを寄るう人（ゆりのゝをまこゝいなば人なるも

罪はのうゝと話話者の中のめゝなれば盗人まやゝられて

滅るゆもてゝ見つるゝは分酒をゝのめ一さらゝも

てなしゝあつうんとぬくめんのまゝたゝびゝてこのゝくのゆの

たりも中おゝ一尤たる盗人机の上をのきゝで一句の

ちけものをおひつけたるゝ

ゝ理の急ゝをのがれて

赤理の撰もわび一鍋りゝ記　野坡

とゝ句を見はこれたゝつのゝゝや理坡の曰ゝのくの

ひく盗人ゝまゝおゝ坊ゝ正殺句ゝたゝくゝまゝのは

ちのきこゝろ刑せられし法をうけ給りて悲び
たまぐ〻なる宵のほゝまも白きなん歌ぐ〻ときこゝの
埋桜の白き花をなぐさむを風人主人宵の事とする
うしさ紅のはりのまゝ〻なる作なれは盛人の中宿
只今まも老らぬなりとかくいふ事を書てのちふ

垣くぐる雁なくなる雪の夜

○郭世雄まの作を
郭世雄を初まの作る
まのみのと雁くるもや宮の夜
書世雄なる事ゆゑ
○李白登樓を詠
李曾許六を初び許六を詠

異物語の風流を武蔵の国の人こゝろのまゝなりいでや
ゆゑはすきかの脚すれ抜木蓮の花なり
○許六病を病む并びに乃ち
許六まゝ芭蕉庵を訪
家ちのうちを加つて支考と桜井の中に遊ぶ
つて人を面をだたまく面しを風雅をそなへ
る風人のれは屏風をたきりて仙侯を感の方子馬
を乗して許六を訪ふ
を降りやそ姿なんなるかき出られあうを降るゝ
しむるふ眉たゝ花を弥濃ともふ降ひめもを
のはをのをりめのをりはる酒をもらを
降つてまる子を知る事

[illegible]

師匠にも此道門の侍る仏の師を又乗たり乗たり

て山に籠り人とかたらはこぼたたるうるふにこそ

万葉集に歴史家にて酒呑まる自然人まもまつて

[illegible]

のんて[illegible]

山ぶみ[illegible]

[illegible]

[illegible]

○万葉集に[illegible]

万葉集を[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 鬼毋貫負ふ事

世のやしなひ主の恩

貫の負をうくし 新

文をうるをうふ

馬をつなぎ

ひのあをくま

手のまつさき

なて書

手ふれん

ふきく

め刃

れば父のかこくいと怪ぞ又みるをきくにも父の眞丈の然
るをぬるの眞丈なる○八こまら川たけのなかれるえだ代とを
て左まか（んとをこなして有をまはまだ世なる何れも
るとをたこ所他ものを人ねをひして久しく西をさる波
面来る新をてのをてこ母をこ母をおきたなぐら毛を
ぬをこ（まぎれ入ぬ鬼畏こ母をこ毛をこ毛をこ
ちくのこるをれたれ波面も所のめこ所こ所して人
の切米のをこをを新じ異れてつこをは犯を
べをこだ壹（をこだ文ををひををこをこ所をこ一つの街は
りを鬼畏が所より日を合に　於ける鬼畏幸をは
てをきくこを世をきれても去れをものはうきをを
をひ強面仙をを面をこ上を毛をれて社中を情をうけを

○　疫鬼　変化を記す遍
疫鬼を具性如何ぞうして祇園は格をおぼえいをを
友をのをを所をこ中月をこ人のををこ中をを世び
少御をきをこ林の比をんおをひ之をこをこ中の
山路を見入り西一面をを一面をを日ををををををを
の岸ををくそめのこり所をの中迷ををををを
の人砌きみ水をわたを小西岸をめやをを合和のををん
ほををこをを中くををををををか（れば大地ををををを
三尺ををり出をを見中ををを毒をこを出をを毒の中を
風を和をををを毒をを毒をを毒をを毒をを毒をを毒
ををなれをををををを疫鬼をををを中
ごをく御をををなを疫鬼ををを（て取業の

るをうけて一歩づゝ前へすゝむこゝろとなりて
なりてのきつゝなり水のわうごき物ひしくゝ
の人れば生物もたゞにこゝろをこゝ氣ずりて
汗をたゞり人家なる入れば源鬼ずおもてをうた
かふ源鬼たのゝの変化をのこるあるゝ打らひて世る
こゝはけ物なるなりゝ山の蛭則なり源鬼なほ及ば
あるゝかこゝりなるは蛭則山の出をこゝらつゝこゝ
出氣を記し産る死ぶのゝらもやれるのめゝ西生
なし多つゝこゝはいくつゝもなく出なりゝ源鬼をおつぶ
し千歳の脳を取る西風こゝるゝ事なりこれ蛭則
おこゝ人ゝこゝ源鬼おこゝる源鬼なれば
源鬼の大さ三尺四尺大すゝて丈餘なる頃ゝは若む

し歩をゝ生じ目の光ゝを射るたゝみをゝ源鬼を
のゝて人をゝこゝらゝをゝきゝ蛭則はくをゝ打ゝて
却て人をゝきゝ人のゝなゝてゝあるゝ多物語るゝ及ゝこゝ
あゝを

○源鬼病の事

源鬼病の事つゝたつひゝゝく事なのはれなれば門人根る立
ようゝさゝうゝの事ゝ方法ゝ家治ゝの勾なゝるゝんゝ可ゝ人ゝの
ゝこゝのゝこゝはゝゝまゝは源鬼目をひらゝこゝるゝかゝ
このつゝんゝじゝゝ生成のゝゝこゝぎゝた
かゝゝゝゝなゝぎゝゝへゝのゝつゝきゝの牛牡丹ゝゝ丸ゝ生ゝ
このゝこゝゝるゝのゝて生成ゝのゝこゝの事ゝ
ぎゝたゝ打ゝあゝんゝてゝゝゝ人ゝ男ゝ小ゝゝゝゝゝて
○麦林枝の産死

麦林枝の産死の事月数の姙娠を婦

これを春来八月時ときまれるを賦めでたくれど雪を
年の初を見る事を知らだおさなきより春の家居の
る雪を見はべる御殿の邸宅の門なる人もまた
さびしみの間をうつる風雅は変を雪るるのりて
雪下ゆるるが春の比ならば梅の花を拾ひ
るんなぎ花をさそひ一句の意を
おもるより下ろす人の踏は踏まりさ花は具体
活る張る梅の中ます白きは雪を拾
乙巳ならば春たまれてまなぶや色めるそもそもさば白
きこて梅花ならば春きそこれも風のぶ春も白き
もおのはきて紅白をたゝるはしめばうつくしき色
んとのうなく如一しが乙風流すかくよめく柳橋を

文ってそ春の錦とはよめるさくば月紀は情ある
らだそのるかきたるるおなるさる綾のあつかひを
はだ　紅梅

○支考春水を才をたかふ

支考春水の面守る春りの春水体精るまえふれる見
花紅白春林る春だ麦林時白見花る春だと
大雪ゑゑして去りぬ牛は見花が来れるを結て
春水の白乙紅白を拾ふ春をあ雪色を乙風
ゆるだ時白花まれて乙見花やまるだ石ひさ
乙即帰る雪白をもして時白花ん春林ゑや
生しと云ふ見花時る「知せんと拾れめくひるうたる
る乙中る

まつ見る白江のくるくるを　見花

東山の雪もとけ　て也

つま一句　雪解をいふ

嶺やうる花の浮雲の旗　て也

又一句　雪かんをふる

阪中で　夫のぶ　鎮城の祝　て也

見花　春をまたぬ　ゆれくてたれたる　柳の情　見花

ゆれくてたれたる　柳の情　見花

きし　主かうて　行方　まぐろ　て也

又

珊瑚　珠の　見花　て　かん　見花

門の　門の　迎る　鮫の　肥　酒　て也

いづれも　あの　鳥を　つぎの　長が　見花　口を　手だて　見花

蕎麦　すき　及ば　見花　蕎麦　及ば　見花

へて　帰り　しそぐ

阪徒ぶる　餞

海辺にも流ありはをすて経を説給ふ。又源氏物
語を見給ふ。紫式部は経を弥陀の来迎
とこそ思なるべし。弥陀も来給ふ
九月十五日鄙山のすそをふらうとてかのも
ゆの道を通りし時ぬかさ山もとつたを過
海道をもしかきを試れ帰り通るもの之一尺の文
章郷よりは二寸とりの書状寛次
なるもの帯よりは二寸くらる書を表事
せるかをもとを作るとて仏ごとを示
給ふ地こと人数
あり源氏は因果のねる法へし帰り
たる加賀の国を加賀と称と

[illegible]

[illegible]

[illegible]